

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：食物栄養学科

資格：教授

氏名：前田 佳予子

研究分野	研究内容のキーワード
1. 高齢者の咀嚼評価 2. 統合失調症患者の咀嚼評価	1. 咬合力、色変わりガム、握力、向精神薬 2. 早食い、抗ユリン薬、咬合力
学位	最終学歴
博士（保健衛生学）、家政学修士、家政学士	鈴鹿医療科学大学大学院 保健衛生学研究科 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 介護支援専門員	1999年11月	
2. 健康運動指導士	1996年01月	
3. 管理栄養士	1983年12月	管理栄養士登録
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 全国在宅医療会議 構成員	2016年07月26日現在に至る	在宅医療の推進に向け、在宅医療提供者、学術関係者、行政で、「在宅医療推進のための基本的な考え方」を共有し、これに沿って、関係者がとるべき具体的な対応について議論していくこととする。
2. 平成28年度厚生労働省委託事業 管理栄養士専門分野別人材育成事業	2016年04月2017年03月30日	本事業は、複雑で解決困難な栄養の問題を有する個人や集団等の対象特性に応じた栄養管理の実施及び食事指導の拠点となる栄養ケアステーションの機能強化に向けて
3. 平成26年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業 管理栄養士による在宅高齢者の栄養管理のあり方に関する調査研究事業	2014年07月2015年03月	管理栄養士による在宅高齢者の栄養管理のあり方に関する調査研究事業で1)管理栄養士による居宅療養管理指導の実施の有無2)管理栄養士による在宅高齢者への栄養管理を行う体制を明らかにした3)在宅高齢者の摂取状況・栄養状況把握方法、栄養食事指導方法と地域連携方法の提案(ガイドライン作成)
4. 平成24年度老人保健健康増進事業 在宅療養患者の摂食状況・栄養状態の把握に関する調査研究	2012年10月15日2013年3月	国立長寿医療研究センター、全国在宅歯科医療・口腔ケア連絡会、全国在宅療養支援診療所、日本介護支援専門員協会、全国薬剤師・在宅療養支援連絡会、日本看護団、日本医師会、全国在宅訪問栄養食事指導研究会で在宅療養患者のより質の高い在宅生活を維持・継続するために実態を調査・把握し、課題を分析する際のアドバイザー
5. 平成27年度岡山県医療介護総合確保基金事業		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 栄養教育論第2版	共	2017年3月27日	朝倉書店	田中敬子, 前田佳予子編 少子高齢化, 人口減少という社会的ニーズに対応するため平成27年4月に発表された国家試験ガイドラインをふまえ, 最新情報を盛り込み, できるだけ幅広い知識が得られるように編集した。
2. 改訂臨地実習ガイドブック	共	2016年02月01日	建帛社	前田佳予子, 高岸和子編 臨地実習ガイドブック内容に「日本人の食事摂取基準」2015年版が公表されたことに伴って記述を見直し「改訂版」とした。
3. 臨地実習ガイドブック	共	2011年02月	建帛社	前田佳予子, 高岸和子, 林宏一, 谷野永和, 岸本三香子 武庫川女子大学食物栄養学科・食生活学科の学生が

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
4. 栄養教育論	共	2010年03月27日	朝倉書店	教育効果の高い実習内容を達成できるように各施設における具体的な実習スケジュールや課題の取り組みを実例で示し、学生が実際の現場をイメージしやすいように具体的な内容にした。
5. 高齢者の栄養障害の原因 嚥下障害Q&A	共	2008年11月	メディカ出版	前田佳予子 田中敬子編 栄養教育推進に必要な総合能力の向上のために、関連科目である「応用栄養学」「公衆栄養学」「臨床栄養学」「給食経営管理論」などを考慮した栄養教育事例の検討や学習に配慮している。また、管理栄養士・栄養士の責務として科学的な根拠に基づき的確な栄養アセスメントに基づく栄養教育の企画、実施、評価の総合マネジメントを行う能力を高めることができるようになっている。
6. クエッション・バンク 管理栄養士 国家試験問題解説	共	2007年07月	MEDIC MEDIA	手嶋登志子、秋山治子、川上純子、工藤美香 高齢者の咀嚼障害によってどのような栄養障害が起こるのか？。咀嚼障害はどのようにアセスメントすればよいのか？。咀嚼障害を起こしやすくなる原因は何か？について説明
7. 高齢者施設用語辞典	共	2007年04月	中央法規	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他
8. 患者指導に役立つ 病態・状況別 栄養管理と看護	共	2007年01月		小室豊允
9. クエッション・バンク 管理栄養士 国家試験問題解説	共	2006年07月	MEDIC MEDIA	1
10. クエッション・バンク 管理栄養士 国家試験問題解説	共	2005年09月	MEDIC MEDIA	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他
11. 在宅患者への訪問栄養指導	共	2004年12月	メディカルレビュー	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他
12. 臨床栄養事例集	共	2004年11月	南山堂	故倉恵 在宅医療は年々高度になっている。今後、在宅患者への栄養管理をどのようにとらえて展開していくかが訪問栄養指導の存続を決定する。現在の在宅訪問栄養食事指導の現況に触れ、慢性閉塞性肺疾患の患者へ他職種とチーム連携を2年以上行い、現在も訪問栄養指導を実施している症例について述べている。
13. 栄養教育論 I	共	2004年11月	建帛社	中村丁次
14. クエスチョン・バンク管理栄養士 国家試験問題解説	共	2004年10月	メディクメディア	中村丁次, 外山健二
15. 事例・症例に学ぶ栄養管理	共	2004年10月	南山堂	青江誠一郎, 阿部尚樹, 有田匡考他 管理栄養士国家試験問題解説の栄養教育論の分野において、解説を担当
16. 給食経営管理・運営論	共	2004年04月	同文書院	中村丁次, 板倉弘重編集 在宅栄養ケアの栄養管理について症例1. 慢性閉塞性肺疾患で独居の男性, 症例2. 低栄養で貧血の高齢女性, 症例3. 糖尿病性腎症でコントロールが必要な独居女性の栄養管理, 栄養管理プラン, 栄養管理の実施について述べている。
17. 給食経営管理論・運営論	共	2003年05月	同文書院	藤沢良知編著 保健・医療・福祉・介護における給食の位置づけと給食経営について、マネジメントの基本的な考え方や方法を学ぶことの重要性について述べ、福祉施設、学校給食、事業所給食について学ぶ。 松月弘恵, 田中律子, 田中弥生, 金子義幸, 田村朝子, 宮田房夫, 本間治子, 辻ひろみ, 清水典子, 渡辺喜弘, 永島伸浩, 淀川都, 大関喜美子
2 学位論文				
1. 産地別日本茶の経口投与における生体機能への影響についての研究	単	2005年03月		お茶には、抗肥満、抗糖尿病効果はカテキンやカフェインが大きく影響すると考えられてきたが、ビタミンC、テアニン、バナジウム以外は大きな差がない同一品種で同一工程のお茶で差があった。単独の成分濃度ではなくその組成が重要であることがわかった。
3 学術論文				
1. 睦町クリニック認定栄養ケア・ステーションにおける在宅訪問栄養食事指導の効果	共	2017年06月01日	日本栄養士会雑誌60(7) 29-37	工藤美香, 田中弥生, 前田佳予子, 他本研究では、睦町クリニックに認定栄養ケア・ステーションを設置し、その業務の一環として在宅訪問栄養食事指導を実施、栄養介入後に患者介護者および連携事業者へのアンケート調査を行い、栄養介入後のアウトカム及び連携方法について検証した。認定栄養ケア・ステーションにおける管理栄養士の栄養介入は、栄養状態を改善し、ADL, QOLも改善傾向を示し、要介護状態にある患者の重症化予防に寄与すると考えられた。
2. 「おたっしや健康手帳」導入による地域での「予防的対応」への効果について	共	2017年03月28日	日本在宅栄養管理学会V ol. 3(2) 119-131	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 わが国では「地域包括ケアシステム」の実現が求められている。今回、地域に在住する高齢者の身体状況・口腔機能状況・栄養状態を調査し、その情報を本人はもとより

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
3. 都市部ならびに農村部における地域在宅女性後期高齢者の栄養状態と生活環境についての検討	共	2016年10月31日	日本家政学会誌 Vol. 67 (2) 99-107	本人を取り巻く栄養状態に関わる全てのスタッフが共有するための媒体として「おたっしや健康手帳」(以下、健康手帳)を作成し、この媒体が「予防的対応」の一つのツールとして活用できるか否かを検討し、「おたっしや健康手帳」は今後、「予防的対応」の一つのツールとしての活用が可能であることが示唆された。 高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子, 桐村ます美 85歳以上の後期高齢者における現状を把握した研究は少なく、また、農村部や都市部などの居住地域別に検討した研究調査はほとんど見られない。本調査は、京都府の農村部k t市(以下k t市)における要支援および要介護認定された地域在宅後期高齢者における3年間の栄養状態、身体機能、口腔機能、QOLの調査から、現状を把握し、効果的なサポートのための基礎資料を得るための調査をおこなった。
4. 在宅療養高齢者の栄養状態-多職種連携との関連-	共	2016年05月26日	日本在宅栄養管理学会誌Vol. 3(1)3-11	大塚理加 齋藤京子 前田佳予子 他在宅療養高齢者を対象とした調査を実施し、多職種による医療・介護サービス提供と栄養状態との関連を検討した訪問歯科とリハ利用者で低栄養が少ないことが示された。また、誤嚥の有無により、サービスの栄養状態への影響に違いが認められた
5. 地域独居高齢者における介護予防に関する介入効果—全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動と有用性について—	共	2012年12月	老年歯科医学27(3), 311-322	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子, 田中弥生, 谷野永和 咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、咬合力アップ運動を導入して、その効果とQOLの維持および向上を目指すことを目的とした。全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動により、介入2年後に介入群が非介入群に比べて握力、咬合力において有意に高値であったことから、介護予防を目指した高齢者の健康づくりに咀嚼力と咬合力の維持・向上を組み込んだ総合的な支援は、QOLの維持および向上に有用であることが示唆された。
6. 地域独居高齢者における全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動の効果と有用性について	共	2012年08月01日	日本栄養士会雑誌55(8) 30-39	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、70歳以上の独居高齢者へ咬合力アップ運動を導入して、その効果とQOLの維持および向上をめざすことを目的とした。全身運動を組み合わせた咬合力アップ運動により、握力、咬合力、咀嚼力の現状維持が見られたことから、介護予防をめざした高齢者の健康づくりに咀嚼力と咬合力の維持・向上を組み込んだ総合的な支援は、QOLの維持および向上に有用であることが示唆された。
7. 在宅訪問栄養食事指導による栄養介入方法とその改善効果の検証	共	2012年08月01日	日本栄養士学会雑誌55(8), 40-48	井上啓子, 中村育子, 高崎美幸, 前田玲, 齋藤郁子, 前田佳予子, 田中弥生 在宅訪問栄養食事指導(訪問栄養指導)を広げにくくするために、管理栄養士がどのような訪問栄養指導を展開し、在宅高齢者の栄養素等摂取量や栄養状態がどのように改善するかを検討した。対象は訪問栄養指導を利用している62例とした。指導継続者は53例で、訪問栄養指導により3ヵ月後のエネルギー、たんぱく質などの栄養素等摂取量に有意差がみられ、それに伴い体重は有意に増加し、NMA、QOLおよびADLが有意に改善した。
8. 糖尿病患者における栄養教育媒体の検討—パンフレット・DVDを用いて—	共	2012年04月10日	日本病態栄養学会誌15(1), 69-79	高橋志乃, 前田佳予子, 佐々木悠里, 瀬川早代, 松葉真, 北谷直美, 辻とも子, 大屋道洋, 清野裕 糖尿病治療の基本は食事療法であり、QOLの維持・向上のため患者に自己効力感をおこさせる栄養教育が求められる。今回、教育媒体として、簡単に調理できる低カロリーメニューを記載したパンフレット及び調理実演を撮影したDVDを作製し、導入効果について検討することを目的とした。DVDを用いた群においてHbA1cに改善傾向がみられ、今後の調理に向けての積極的な姿勢などが得られたことから、視覚的に訴える教育媒体の有効性が示唆された。
9. ケアマネジメントにおける訪問栄養食事指導の現状および問題点—栄養ケア・ステーションの今後の展開—	共	2010年07月1日	日本栄養士会雑誌53(7), 22-30	前田佳予子, 手嶋登志子, 中村育子, 田中弥生 施率を上げるためには、管理栄養士の在宅に対する意識向上および、利用者のケアプランを作成するケアマネジャーや主治医に訪問栄養指導の重要性を普及啓発することを目標とする必要がある。今回、我々は、訪問栄養指導を導入することにより効果があると多職種に理解されてもなぜ、実施率が低いのか、その原因を明らかにした。
10. 高齢者の咬合力と食生活について	共	2009年09月01日	保健の科学, 51(9), 635-639	前田佳予子, 高橋志乃, 谷野永和 高齢者において咬合力に影響を及ぼす要因について明らかにすることを目的とし、介護老人保健施設を利用している高齢者36人を対象に咬合力の測定と摂

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
11. 肥満症女性患者に対するストレスマネージメント併用による食事指導の意義	共	2008年	肥満研究14(2), 136-144	取可能食品に関するアンケート調査、食事調査を実施した。高齢者において残存歯数を多く残すことや生活活動量の増加が咬合力の維持に有効であり、咬合力を維持することにより、咀嚼難易度の高い食品の摂取が可能となると考えられる。 邊見 史子, 梅川 常和, 小暮 彰典, 前田 佳予子, 吉田 俊秀 今回「ストレスマネージメント併用療法を、医師と管理栄養士の両者が併せ行うことにより、患者の精神面が補強されれば減量達成率は向上する」という仮説を立て検証した。対象は、肥満外来通院中の女性患者250名とした。医師と管理栄養士が併せ行う群では、ストレスのない群に匹敵する成績を示した。以上の成績は、我々の仮説が立証されたことを示している。
12. 京都府W町における高齢者の食への取り組みのための地域診断結果ープリシード・プロシードモデルを活用してー	共	2007年06月	日本家政学会	柴田亜樹, 松葉真, 石原領子, 前田佳予子
13. Inhibitory Effects of Orally Administered Green Tea on the Elevation of Blood Sugar in db/db Mice with Respect to Places of Production	共	2005年01月	Medicine and Biology	前田佳予子, 長谷川武夫 産地別茶の糖尿病マウス (db/db mice) に対する血糖値上昇抑制作用について検討した。
14. EFFECTS OF LONG-TERM ORAL ADMINISTRATION OF GREEN TEA CULTIVATED IN DIFFERENT DISTRICTS IN JAPAN ON BODY WEIGHT, BLOOD LIPID AND GLUCOSE LEVELS ON db/db MICE	共	2005年	Journal of Food Biochemistry	KAYOKO MAEDA, TAKEO HASEGAWA, KOUSUKE MURABAYASHI, ATUSHI FUKUYAMA, and MICHIIHIRO OHYA
15. Non-Invasive Measurement of the Temperature Using Scanning Small Coils	共	2004年12月	Japanese Journal of Hyperthermic Oncology	SATOSHI ANDO, HAJIME MONZEN, MORIKAZU AMANO, HIRONOBU ONO, TOMOAKI SUZUKI, KAYOKO MAEDA, ATSUSHI FUKUYAMA, TOHRU TAKAHASHI, ITSUO YAMAMOTO, TAKEO HASEGAWA 生体の温度を測る方法として、熱電対温度計がある。熱電対温度計を使う問題として、部分的な場所のみしか温度が測定できないこと、患者を大きく侵襲することがあげられる。そのうえ、ホットスポットを知ることができない。そこで我々はコイルを使って温度を測ることを研究した。本研究によって得られた結果は被加温体の電流密度を測定すれば、非侵襲的に温度が測定できることがわかった。
16. 産地別茶の経口投与による2型糖尿病マウスの体重抑制効果	共	2004年09月	医学と生物学	村林甲介, 長谷川武夫, 鈴木郁功, 大屋道洋 産地別茶の糖尿病マウス (db/db mice) に対する体重抑制効果について16週間連続投与を行った結果、静岡県産のお茶に体重抑制効果があった。
17. 高齢者糖尿病の食事療法	単	2003年06月	Diabetes Forum Tier	

その他

1. 学会ゲストスピーカー

1. 在宅療養高齢者の栄養管理の現状～メタボからフレイル、看取り期へ～」管理栄養士の立場から	単	2017年06月17日	第19回日本在宅医学会大会(名古屋)	シンポジスト在宅療養高齢者の栄養管理の現状～メタボからフレイル、看取り期へ～」管理栄養士の立場から
2. 在宅医療現場での高齢女性へのケアと多職種連携ー管理栄養士の立場からー	単	2016年11月06日	第31回日本女性医学学会学術集会(京都)	シンポジスト在宅訪問管理栄養士が、在宅医療現場での高齢女性への栄養ケアの実態についての調査結果と女性介護者の介護上の問題と高齢女性の栄養ケアの実態と問題点について述べた。
3. これからの訪問栄養士 超高齢化社会に必要とされる在宅訪問栄養食事指導とその現状	単	2015年06月	日本在宅医療学会学術集会(東京)	シンポジスト
4. 在宅栄養管理の現状と課題ー在宅訪問管理栄養士の立場からー	単	2013年10月	第35回日本臨床栄養学会総会・第34回日本臨床栄養協会総会 第11回大連合大会	シンポジウム「在宅栄養管理の現状と今後の展開」シンポジスト
5. 在宅訪問栄養食事指導の現状と課題ー在宅訪問栄養食事指導へのチャレンジー	単	2013年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	シンポジウム「地域医療と地域栄養の現状と課題」シンポジスト
6. 栄養教育学・在宅栄養教育の立場から	単	2012年12月	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	パネルディスカッション「実践栄養学10年の変遷と未来」パネリスト
7. 第22回日本老年医学会近畿地方会 市民公開講座「高齢者のくらしと栄養」	単	2011年11月		地域高齢者の咬合力と介護予防のための栄養管理
8. 3. ケア・マネジメントにおける訪問栄養食事指導の現状および問	単	2010年06月	第21回日本在宅医療学会学術集会	シンポジウム1「病院から在宅へ、嚥下・食事摂取の各職種の関わり」シンポジスト

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
題点				
2. 学会発表				
1. 地域高齢者における継続的な予防的対応（咬合力アップ運動の8年継続）の取り組みの評価	共	2017年09月	第64回日本栄養改善学会学術総会（徳島）	前田佳予子, 山野葉子, 高橋志乃咀嚼力アップ運動では口腔機能の維持・向上に効果がみられた。ミニ栄養講座では食環境における食物アクセスや情報アクセス面で効果があったと思われる。また、ふれあい昼食会や公民館への外出が社会参加の機会となっていることから咀嚼力アップ運動はサルコペニアやフレイルの予防的対応としての効果があると示唆された。
2. 地域在住高齢者における食環境整備の在り方に関する検討-配食サービスの現状と課題-	共	2017年07月	第5回日本在宅栄養管理学会（東京）	高橋志乃 田中弥生 前田佳予子 近年、高齢化が急速に進むわが国において、高齢者が住み慣れた地域で健康を維持し、生活していくうえで食生活支援方法を整えていくことは重要な課題の一つである。配食サービスは食の調達が難しくなる高齢者の為の食事や栄養素の供給源として有用である一方、配食サービス開始時に利用者の状態把握が不十分であることや、利用者に応じた食提供が不十分であることが課題として挙げられている。そこで本研究は、食生活支援の一つである配食サービスに焦点を当て、配食サービスの現状、利用者の要望ならびに意識について検討することを目的とした。
3. 精神科において高齢者の咀嚼力向上を目的とした取り組み	共	2017年02月23日	第32回日本静脈経腸栄養学会(岡山)	加齢に伴う身体的問題の表出は避け難いものであるが、本人の意識に変容を求め、他職種がチームで継続的にかかわることが、一旦停止した咀嚼力も維持向上することが可能であることが示唆され、予防改善に有用な手段となり得るものと考えられる。
4. 在宅療養高齢者の栄養状態・摂食状況について	共	2016年06月	第4回日本在宅栄養管理学会(西宮市)	大塚理加 齋藤京子 前田佳予子他 栄養状態は、在宅療養高齢者の健康に重要である。だが、我が国においては、在宅療養高齢者の健康、特に栄養状態の調査は数多くは行われていない。そこで本研究では、医療系の訪問サービスを受けている在宅療養高齢者の栄養状態と摂食状況の関連を明らかにすることを目的とした。 在宅療養高齢者の栄養状態の維持・向上には、経口摂取が必要である。そのためには、嚥下機能が重要であり、在宅高齢者の嚥下機能や口腔状態に配慮した食事の提供が必要となる。
5. 都市部ならびに農村部における地域在宅後期高齢者（女性）の栄養状態と生活環境の現状についての検討	共	2015年09月26日	第62回日本栄養改善学会学術総会 福岡国際会議場	高橋志乃 中村早緒里 前田佳予子 わが国の高齢化率は、年々増加しており、地域在宅高齢者が自立した日々の生活を支えるための、より効果的なサポートには、高齢者の栄養状態ならびに身体機能と併せて、高齢者の意欲や取り囲む環境の違いについても検討することが重要であると考えられる。本調査は地域在宅後期高齢者（女性）を対象に、現状を把握し、より効果的なサポートのための基礎資料を得ることを目的とした。 高齢者の健康を支える要因は、栄養状態、身体状況、社会的要因、精神的健康度など多岐にわたり、それぞれ関連をもつことから、対象者のニーズに応じた多様な面から、高齢者を支援することの重要性が示唆された。
6. 地域高齢者（都市部）における咬合力と食生活の関連について	共	2015年09月	第62回日本栄養改善学会学術総会(福岡国際会議場)	前田佳予子, 高橋志乃, 中村早緒里 食べることは、QOLの向上や身体的に健康な状態を維持するための基本的な活動であるだけでなく、高齢期では、生きがいや介護予防、介護の重症化予防の上から「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、都市部の高齢者において咬合力や咀嚼力の違いが食生活およびQOLに影響があるのかについて調査を行った。高値群は咀嚼能力が低値群よりも高い値を示し、入れ歯使用者の割合が少なかった。このことより、食事内容が充実することが、栄養状態に関与していると考えられる。よって、咬合力の割合が高いと口腔能力・栄養状態が良いと推測された。
7. 地域高齢者における全身運動を組み込んだ咀嚼力アップ運動の効果と介護予防の有用性	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 高齢期における咀嚼力アップに伴うQOL維持・向上を目指すことを目的とし、咀嚼力アップ運動を導入し効果を検討した。2008年から2013年の5年間N市N地区の昼食会と咀嚼力アップ運動に参加する9人を介入群、昼食会のみ参加する23人を対照群とした。介入群で咬合力・咀嚼力・握力の維持および向上が見られ、SF-8の精神的サマリースコアも高値であった。咬合力アップ運動は口腔機能の維持や向上のみならず、QOLの向上を図り介護予防に有用であると示唆された。
8. 地域高齢者における全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動の効果と介護予防の有用性	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	芝崎美幸, 高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 高齢者の介護予防に関して運動器機能向上・維持だけでなく、口腔器機能向上・維持も期待できる咬

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
9. 在宅療養高齢者の栄養状態（BMI）は1年後の生命予後に影響を及ぼすか？	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	<p>合力アップ運動の方法と有用性を検討した。2009年から2013年にかけて地域の昼食会の後に行われる運動に継続参加している介入群と、参加していない対照群を比較した。介入5年を経て、介入群は握力の変化量が増加したのに対し、対照群は低下した。咬合力については両群ともに低下していたが、介入群のほうが低下は緩やかであった。咬合力アップ運動へ参加することは社会参加のきっかけを与え、「閉じこもり予防・支援」も期待できることばかりでなく介護予防においても有用性があると示唆された。</p> <p>齋藤京子, 大塚理加, 前田佳予子 在宅療養高齢者において生活の質の向上のために、栄養状態と身体機能は重要である。そこで、在宅療養高齢者の栄養状態を把握する指標の1つである体格指数(BMI)と1年後の生命予後との関連について検討した。対象者は在宅で診療または訪問対応した65歳以上の在宅療養高齢者で、最終的な解析対象者は771名である。ベースライン時のBMIカテゴリー別にみた1年後の死亡のオッズ比により、在宅療養高齢者のうちBMIが低い者は1年後の死亡に影響を与えている可能性があることが示唆された。</p>
10. 京都府に居住する高齢者のMNA分類による栄養状態と咀嚼能力の関連について	共	2014年10月	第73回日本公衆衛生学会総会	<p>高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、京都府の都市部ならびに農村部における介護保険利用者に対して、栄養評価と咀嚼能力の関連について検討した。2011年から2013年の3年間に京都府k・t市の4施設に通所する65歳以上の女性高齢者を対象に調査を行った。対象者をMNA分類による低栄養のリスクあり群とリスクなし群に分類した。リスクなし群で握力、咀嚼力、咬合力の値が大きくなる傾向がみられ、咀嚼能力と栄養状態は関連があると推測される。</p>
11. 在宅訪問栄養食事指導の課題ー在宅訪問管理栄養士へのアンケート結果からー	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	<p>井上啓子, 前田佳予子, 中村育子, 田中弥生 2011年度より公益社団法人日本栄養士会・全国在宅訪問栄養食事指導研究会認定の「在宅訪問権利栄養士」の制度がスタートし、2012年度は193名の認定者が誕生した。この認定者を対象に認定のための実践レポート作成とその後の訪問栄養食事指導活動についてのアンケートを実施したのでそこから見えてくる課題や問題点を報告する。本認定制度の課題として、在宅訪問栄養食事指導の認知度を高める活動や実践活動の効果の検証、在宅訪問管理栄養士のスキルアップ研修の実施など早急に取り組む課題が明らかになった。</p>
12. アメリカンフットボール部の食事状況について～高校生と大学生の違いについて～	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	<p>松葉真, 藤田和代, 高橋志乃, 前田佳予子, 松葉圭子, 油谷浩之 K大学・K高校アメリカンフットボール部選手の食事摂取について検討し、各ステージにおける適切な食事摂取を目指すために、食事調査およびアンケートを実施した。高校生は、主食量が多くビタミンB群の摂取が低いためエネルギーの変換効率が悪いことが示唆された。高校生に比べて、大学生は手軽に食べられる食品で食事を済ませているため、プラス1品料理提示が必要とされる。食品の購入時に、栄養成分表示を見る割合は、高校生で4割に満たなかったため、中学や高校入学時に栄養成分表示を確認して購入する習慣づけを行う必要があると考えられる。</p>
13. 訪問栄養食事指導における栄養介入効果の検討	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	<p>大上恵理, 高橋志乃, 前田佳予子, 田貝泉 急速に進展する高齢化の中、在宅医療の進展が表明され、ケアの場が病院等の施設から地域へと移行してきている。それに伴い、管理栄養士による訪問栄養食事指導の必要性が言われている。そこで、我々は訪問栄養食事指導による栄養介入を行うことで、対象者の栄養状態にどのような影響をおよぼすのかを検討した。我々の調査では、訪問栄養食事指導の導入により栄養状態は改善したと考えられる。また、バーセルインデックス、SF-8の値も向上したことから、訪問栄養食事指導は栄養状態だけでなく、身体活動、精神状態にも寄与すると考えられる。</p>
14. 地域高齢者における咬合力アップ運動の効果と介護予防の有用性について	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	<p>中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 今回、介護予防に関する介入効果として、咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、咬合力アップに伴うQOL維持および向上を目指すことを目的として、咬合力アップ運動を挿入し、その導入効果を検討した。運動介入群は咀嚼能力が維持できており、食品選択の幅が広がり、比較的栄養状態が良好であると考えられる。また、健康関連尺度（SF-8）の精神的サマリスコアにおいて有意差があったことから、咬</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
15. 地域在宅高齢者（農村部）における栄養状態と食生活習慣の関連について	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	合力アップ運動は口腔機能の向上だけでなくとどまらず、QOLの向上を図り、介護予防においても有用性があると示唆された。 桐村ます美, 中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについて調査を行った。2013年8月上旬に京都府K・T市の介護保険利用者で4施設に通所する65歳以上の高齢者122名を対象に調査を実施した。栄養状態リスクなし群において咬合力が高値であった。栄養状態リスクなし群は、三世帯世帯が多く、食事の中の会話があり、食事を美味しいと感じていることから、食環境が栄養状態に影響することが推察される。
16. 地域在宅高齢者（農村部）における4年間の栄養状態と食生活習慣の継時的変化について	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	高橋志乃, 桐村ます美, 前田佳予子, 中村早緒里 高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、農村部における介護保険利用者の栄養状態や食生活習慣の4年間の継時的変化についての調査を行った。2010年から2013年の4年間に京都府k・t市の介護保険利用者で4施設に通所する65歳以上の高齢者を対象に調査を行った。同時に4年間継続調査ができた9名についても検討を行った。継続調査者は咬合力、握力に大差がなく、咀嚼力が良好であったところから、栄養状態を比較的維持できていたと考えられる。
17. 地域在宅高齢者（都市部）における栄養状態と食生活習慣の関連について	共	2014年09月	第61回日本栄養改善学会学術総会	前田佳予子, 中村早緒里, 高橋志乃, 桐村ます美 高齢期では、生きがいおよび介護予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについての調査を行った。2010年から2013年の4年間に京都市のN施設に通所し、介護保険を利用する高齢者を対象に調査を実施した。また、継続調査が可能であった13名についても検討を行った。MNA分類の栄養状態の割合の推移に変化はみられなかった。握力、咬合力は年々低下傾向であったが、咀嚼力は良くなっており、継続調査の13名もほぼ同様の結果がみられた。
18. 統合失調症患者への噛むことの意識づけとマスティノート導入による早食いへの改善効果	共	2014年01月	第17回日本病態栄養学会年次学術集会	高橋志乃, 榎本ゆり子, 井戸由美子, 前田佳予子 統合失調症の誤嚥・窒息に関する疾患の予防の必要性が指摘されている中、統合失調症の多くには「早食い」という食行動の問題がある。2009年より、我々は食事に音楽や意識づけ等を導入して、4年目の「早食い」の改善効果ならびに、介入媒体としてマスティノートの効果について検討をした。噛むことの意識づけの導入をして4年目になるが、介入前と比べて、食事時間の延長がみられ、咀嚼能力は横ばい状態であるということは、ある程度の効果があったと考えられる。
19. 大阪・京都府下の精神科デイケア通所者における咀嚼機能改善プログラムの実施-機能改善のためのノートを使用して-	共	2013年11月	第2回日本精神科医学会学術大会	榎本ゆり子, 高田香, 増子美佐, 井戸由美子, 安田章子, 亀田清子, 前田佳予子, 高橋志乃
20. 在宅療養高齢者における食欲と栄養状態の関連について	共	2013年10月	第35回日本臨床栄養学会総会・第34回日本臨床栄養協会総会 第11回大連合大会	大塚理加, 齊藤京子, 葛谷雅文, 前田佳予子, 三浦久幸 食欲の不振は、体重減少や栄養状態の悪化につながる。特に、疾患があり、在宅で療養している高齢者にとって、食欲の有無はQOLにも、身体状況にも関連すると考えられる。しかし、これまで我が国の在宅療養高齢者における検討はなされていない。そこで、本研究では食欲と栄養状態について、在宅療養高齢者の実態を示すとともに、その関連について検討する。本研究の結果から、栄養状態と食欲との関連が認められた。今後は、疾患や摂食状況等の食欲への関連要因を統制した分析を行い、食欲と栄養状態の関連について、さらに検討を進めたい。
21. 地域在宅高齢者（都市部）における栄養状態と食生活習慣の関連について	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	高橋志乃, 桐村ます美, 前田佳予子 高齢期では、生きがいや介護予防、介護の重症化予防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについて、2012年5～7月にk市に居住する介護保険利用者44名を対象に調査を行った。MNA分類による低栄養のリスクなし群は体重、BMI、咬合力、握力が高い傾向であった。また、健康関連QOLも高いことから、栄養状態や健康関連QOLを良好に保つことができていると推測された。
22. 地域在宅高齢者（農村部）における栄養状態と食生活習慣の関連について	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	桐村ます美, 高橋志乃, 前田佳予子 高齢期では、生きがいや介護予防、介護の重症化予

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
23. 大学アメリカンフットボール部員の食事対策について～レギュラー選手とサブ選手の比較～	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	防の上から、「噛んで食べる」ことの必要性が言われている。今回、栄養状態の違いが高齢期における口腔機能の維持、向上に影響があるかについて、2012年8月上旬に京都府K・T市の介護保険利用者で4施設に通所する65歳以上の高齢者124名を対象に調査を行った。咀嚼能力が強いと握力も強くなるといわれているが、我々の調査においても、MNA分類による栄養状態リスクなし群が、栄養状態リスクあり群に比べ、咀嚼力、咬合力が高い値の傾向を示し、握力も強い傾向であった。 藤田和代, 高橋志乃, 前田佳予子, 松葉圭子, 油谷浩之, 松葉真, 油谷浩之, 松葉真 2012年8月より、K大学アメリカンフットボール部員1～4年生の同意を得た合計122名を対象に、合宿時のレギュラー選手とサブ選手の食事や練習での取り組みの差がみられたことから、精神・疲労状態や食事調査の分析を行った。POMS調査でレギュラー選手に比べ、サブ選手では、合宿後に「緊張・不安」が高かった。レギュラー選手はサブ選手よりも合宿前後で「活力」が高かった。主食類の摂取が多い理由としてポジション別・学年別のPOMS調査でも比較してみると「緊張・不安」の値が2年生で一番低く食事面に対するプレッシャーも高いと考えられる。
24. 兵庫県内の在宅高齢者における介護予防に関する介入効果	共	2013年09月	第60回日本栄養改善学会学術総会	前田佳予子, 高橋志乃 近年、国は介護予防に力を入れており、地域在宅高齢者においても、様々な研究がなされている。今回、介護予防に関する介入効果として、咬合力や咀嚼力と運動の関連性に着目し、咬合力アップに伴うQOL維持および向上を目指すことを目的として、咬合力アップ運動を導入し、その導入効果を検討した。N市における全身運動を組み込んだ咬合力アップ運動介入は咬合力、咀嚼力および握力の維持や向上がみられたことから高齢者の健康づくりに運動介入は効果があると考えられた。
25. 統合失調症患者の噛むことの意識づけを継続することによる早食いへの改善効果	共	2013年01月	第16回日本病態栄養学会年次学術集会	前田佳予子, 高橋志乃, 中村早緒里, 井戸由美子, 榎本ゆり子 統合失調症の多くには「早食い」という食行動の問題がある。2009年より、我々は食事に音楽や意識づけ等を導入して、3年目の「早食い」の改善効果について検討した。噛むことの意識づけの導入をして3年目になるが、食事時間が延長し、咬合力、握力が介入前を比べて、ほぼ横ばい状態であるということは、ある程度の効果があったと考えられる。
26. 兵庫県内の地域在宅高齢者における介護予防に関する検討	共	2012年12月	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子, 福尾恵介, 谷野永和 現在、各地域で地域高齢者を対象にボランティアが中心となって様々な助成事業が行われているが、ボランティアの高齢化や補助金等の問題がある。今回、身体計測等を行い、地域在住高齢者の現状を知り、今後の助成事業についての検討を行うことを目的とした。今後、ボランティアの負担が少ない助成事業へと移行し、その中で運動や音楽、学生が中心となった世代間交流等を取り入れ、介護予防にもつながる活動を同時行っていく必要があると思われる。
27. 在宅高齢者の療養食提供に対する訪問介護員の意識と共働への課題	共	2012年12月	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	時岡奈穂子, 中村早緒里, 高橋志乃, 加川稚佳子, 前田佳予子 在宅高齢者が、今後ますます増加する傾向にあり、各種の療養食を必要とする者も増加すると推察される。今回、療養食提供に対する訪問介護員の意識を把握し、協働における課題とニーズを把握する事を目的とし調査を行った。栄養士の積極的な関わりは、疾病の改善のみに留まらず、介護者の負担軽減、充実したケアの提供につながると推測される。
28. デイケア通所者における咬合力に関する意識調査	共	2012年10月	第1回日本精神科医学会学術大会	片平有美, 田中遥佳, 辻川侑子, 河崎建人, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 前田佳予子 デイケア通所者に対し咬合力の実態調査を行い、リスクを把握した後、誤嚥を予防する取り組みを6ヶ月行い、アンケートによる意識調査を行った。握力、咬合力は全国の同年代の平均値と比べて低かった。アンケート結果から、食事に対する全体の大きな意識の変化はなかった。今後はプログラムの見直しを行い、利用者自身が、食事を安全に楽しむために自分で気をつけることが大切であると理解できる支援を継続して提供していく必要がある。
29. 咬合力アップ運動の介入効果と有用性について	共	2012年10月	第71回日本公衆衛生学会総会	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳予子 介護予防の支援を目指して咬合力アップ運動の効果および咬合力アップに伴うQOLの維持と向上を目指して介護予防の要因を明らかにするために運動介入効果が有用であるかどうかを検討する。地域高齢者に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
30. 大学アメリカンフットボール選手の夏季合宿の食事対策について	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>において、咬合力アップ運動は、咬合力の維持・向上に効果があると推察された。介護予防を目指した高齢者の健康づくりに咀嚼力や咬合力の維持および向上を組み込んだ運動介入効果は有用であると考えられた。</p> <p>藤田和代, 高橋志乃, 前田佳予子, 松葉圭子, 油谷浩之, 松葉真 毎年K大学アメリカンフットボール部の夏季合宿では、選手の基礎体力の向上と秋季リーグ戦に向けてのシュミレーションを行っている。2011年度と2010年度に得たアンケート結果をもとに、夏季合宿中の朝食献立の更なる改善とミネラルを多く含むクラッシュゼリーの提供を行った。夏季合宿中だけでなく試合期の練習および試合前やハーフタイム中にもクラッシュゼリー提供することを念頭に入れてチームと調整していきたい。</p>
31. 在宅高齢者の食事療養環境の整備について～訪問介護員との共働事例～	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>時岡奈穂子, 中村早緒里, 高橋志乃, 加川稚佳子, 前田佳予子 在宅高齢者の増加とともに療養食利用者は今後増加すると思われるが、そのフォロー体制は完全とはいえない。食事療養の環境を整える取り組みを訪問介護員と共働で行い、その課題とニーズを把握する事を目的とし調査を行った。訪問介護員の持つ知識と技術を栄養士がサポートすることにより、効果的な療養食の提供が可能と考える。栄養士の積極的な関わりによって、疾病の改善のみに留まらず、充実したケアの提供につながると推測された。</p>
32. K市に居住する高齢者の咬合力分類による咀嚼能力と栄養状態の関連について	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 K市に在住するデイサービス利用者（介護保険利用者）で調査に同意の得られた72名を対象に、握力、咬合力、色変わりガムを用いた咀嚼能力の測定を行った。本研究では、咬合力高値群において、握力および咀嚼能力が咬合力低値群よりも高くなる傾向が伺えた。なお、MNA分類において咬合力高値群が栄養状態良好を示す傾向がみられたことから、咬合力は口腔機能だけでなく栄養状態にも関連があると推察された。</p>
33. 在宅訪問栄養食事指導による栄養介入効果の検証	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>井上啓子, 中村育子, 高崎美幸, 前田佳予子, 田中弥生 在宅訪問栄養食事指導を実施している管理栄養士は、どのような訪問栄養食事指導を展開し、それにより、在宅療養者の栄養摂取状況や栄養状態がどういった状態にあるかを検討した。対象は全国在宅訪問栄養食事指導研究会の会員が訪問栄養食事指導を実施している在宅療養者62例とした。在宅訪問栄養食事指導により、在宅療養者の栄養摂取量を有意に増加させ、体重などの栄養指標、QOLおよびADL有意に改善させることができた。</p>
34. 医療から介護における栄養管理ツール（栄養手帳）のネットワーク形成の有用性の検討	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>工各関連機関が支援方針等の情報を共有するための栄養管理ツール（栄養手帳）を作成しその社会ネットワークの共有化を検討した。今回の活動を通じて、栄養管理ツールの活用について一定の意義が見出されたが、栄養管理ツール自体がネットワーク形成等に有効に活用されているかは長期間でみる必要があるであった。しかし管理栄養士が訪問することで食事について関心を持ち、家族や支援者との情報共有が密になったといえる。藤美香, 田中弥生, 前田佳予子, 松崎政三, 高橋史江</p>
35. 京都府下に居住する高齢者の咬合力と食生活習慣の関連について	共	2012年09月	第59回日本栄養改善学会学術総会	<p>桐村ます美, 高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳予子 K・T市の介護保険利用者で4施設に通所する高齢者で、調査に同意を得られた99名を対象者に咬合力、咀嚼力、握力の測定及び、食生活状況調査を行った。咬合力が強いと握力、咀嚼力ともに高値を示した。食生活状況調査では、咬合力高値群と咬合力低値群の食事での会話の有無、食べられる食品の硬さに差が見られたことにより、世帯構成の違い等によって咬合力に影響を与えていることが推測された。</p>
36. 大阪府下の統合失調症患者における咀嚼機能評価のフローチャート実用化に向けての検討	共	2012年01月	第15回日本病態栄養学会年次学術総会	<p>前田佳予子, 高橋志乃, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 畔上多恵子, 西田和美 今回、我々は咀嚼能力の指標である咬合力と色変わりチューインガム法から評価して現状の把握を行い、フローチャートを作成した。咬合力と色変わりガム法によるb*値の咀嚼機能評価のフローチャート作成により、実践の場において情報の共有を行うことで、精神デイケア職員が統合失調症患者の誤嚥・窒息を未然に防ぐことができると考えられた。</p>
37. 統合失調症患者の噛むことの意識づけによる早食いへの改善効果	共	2012年01月	第15回日本病態栄養学会年次学術総会	<p>高橋志乃, 前田佳予子, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 中村早緒里, 畔上多恵子, 西田和美 統合失調症患者の多くには「早食い」という食行動</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
38. 統合失調症におけるメタボリック シンドローム対策と認知行動療法 による栄養指導の成果	共	2012年01月	第15回日本病態栄養学 会年次学術総会	の問題がある。2009年より、我々は食事中に音楽や 意識づけ等を導入することで「早食い」の改善効果 について検討した。対象者の平均デイケア利用年数 は長期で、社会的な刺激も少なく、陰性症状やホス ピタリズムなど意欲減退傾向にある患者が多くみら れる。食事を「単に食べる食事」から「ゆっくり楽 しみながら食べる」BGM介入や声かけて食事摂取時間 が延長したと考えられる。
39. 京都府に居住する高齢者のMNA分 類による栄養状態と咀嚼能力の関 連について	共	2011年10月	第70回日本公衆衛生学 会総会	井戸由美子, 中村友紀, 田頭優, 佐谷誠司, 岡村武彦, 前 田佳子子 統合失調症患者は身体脆弱性や薬剤の副作用のより 、メタボリックシンドロームに罹る危険性が高いと いわれている。我々は2002年に、多職種協働による 栄養指導などの認知行動療法プログラムをNSTで取り 組んできた結果、栄養管理の継続や栄養状態の改善 ・維持が可能になったので報告する。患者の社会的 背景を踏まえた上で個別的且つ包括的に支援できる 多職種協働による栄養改善のための認知行動療法が 有効であると考えられる。
40. 地域高齢者における咬合力アップ 事業の効果と有用性について	共	2011年10月	第70回日本公衆衛生学 会総会	高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳子子 本研究では、地域高齢者に対して簡易栄養状態評価 表による栄養評価と、咀嚼能力との関連について検 討を行なった。栄養状態良好群で握力・咬合力・咀 嚼力が高値であったため、この3点も栄養状態に関連 があると考えられた。また、栄養状態良好群におい て主観的口腔状態が良好であったことより、口腔機 能の維持が栄養状態の低下を防ぐことが示唆された 。
41. K・T市に居住する高齢者のMNA分 類による栄養状態と咀嚼能力の関 連性について	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学 会学術総会	中村早緒里, 前田佳子子, 高橋志乃 介護予防の支援を目指して咬合力アップ運動の効果 と咬合力アップに伴うQOL維持・向上を目指して介護 予防の要因を明らかにするために運動が有用である かどうかを検討した。地域高齢者において、咬合力 アップトレーニングは、咬合力の維持・向上に効果 があると推察された。介護予防を目指した高齢者の 健康づくりに咀嚼力・咬合力の維持・向上を組み込 んだ総合的な支援事業は有用であると考えられた。
42. K市に居住する高齢者のMNA分類に よる栄養状態と咀嚼能力の関連性 について	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学 会学術総会	前田佳子子, 高橋志乃, 桐村ます美, 中村早緒里 栄養状態や生活状況の違いが高齢期における口腔機 能の維持、向上に影響があるかについて今回、調査 を行なった。簡易栄養状態評価を用いて、対象者を リスクあり群とリスクなし群に分類した。介護保険 利用者のリスクなし群は、リスクあり群より、握力 、咬合力、咀嚼力の全ての項目で高い傾向にあった 。
43. 地域高齢者における咬合力アップ 事業の効果と有効性について	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学 会学術総会	高橋志乃, 中村早緒里, 前田佳子子 本研究では、地域在宅高齢者に対して簡易栄養状態 評価表による栄養評価と、咀嚼能力との関連につい て検討を行なった。対象者を栄養状態別にリスクな し群とリスクあり群に分類した。リスクなし群で握 力・咬合力・咀嚼力が高値であったため、この3点も 栄養状態に関連があると考えられた。また、リスク なし群において主観的口腔状態が良好で、口腔機能 の維持が栄養状態の低下を防いだ。
44. アメリカンフットボール部夏季合 宿時の食事改善の対応について～ アンケート結果を用いた一考察～	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学 会学術総会	中村早緒里, 高橋志乃, 前田佳子子, 松葉真, 谷野永和 介護予防の支援を目指して咬合力アップ運動の効果 と咬合力アップに伴うQOL維持・向上を目指して介護 予防の要因を明らかにするために運動が有用である かどうかを検討した。地域高齢者において、咬合力 トレーニングは、咬合力の維持・向上に効果がある と推察された。介護予防を目指した高齢者の健康づ くり咀嚼力・咬合力の維持・向上を組み込んだ総 合的な支援事業は有用であると考えられた。
45. ふれあい昼食会参加ひとり暮らし 高齢者の身体計測値と喫食記録の 関連	共	2011年09月	第58回日本栄養改善学 会学術総会	藤田和世, 高橋志乃, 前田佳子子, 松葉圭子, 油谷浩之, 松葉真 K大学アメリカンフットボール部1～4年生の138名を 対象者とし、2010年8月10日～14日に実施された夏季 合宿で提供した朝食およびクラッシュゼリーについ て、後日アンケート調査による評価を行なった。従 来の朝食の問題点より、今回は井類に具だくさんの 汁物を付けた形で提供した。ゼリーの摂取方法や提 供時間では良い数値が得られた。更なる改善に向け て、少数意見も加味し次年度以降もサポートを行う 予定である。
				谷野永和, 横溝佐衣子, 山本遥菜, 前田佳子子, 堀内理 恵, 福尾恵介 ひとり暮らし高齢者の身体状況を調査し、その結果 簡便なカレンダー方式での食事喫食記入による身体

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
46. 大阪府下の精神科デイケア通所患者における咀嚼機能評価の変化について（第2報）	共	2011年07月	第39回日本精神科病院協会精神医学会	状態との関連を検討した。ひとり暮らし高齢者においては加齢にともない体重、骨密度は減少率が高くなるが、握力は関連を示さなかった。簡便なカレンダー方式での喫食記録は、回答率の高い群、喫食率の高い群とも体重、BMI、握力との関連が推察され、低栄養予防のツールとして効果が期待できる。 榎本ゆり子, 井戸由美子, 西田和美, 畔上多恵子, 前田佳子, 高橋志乃 大阪府下の精神科病院で、咀嚼・咬合力向上のプログラムを6ヶ月間行った3デイケア通所中の患者を対象とし、昨年6月に本研究に同意を得ることのできた患者56名に再調査を行なった。6ヶ月間の間では患者のデータには大きな変化はなかったが、職員に実施したアンケート調査から、本研究が開始されたことにより、患者の早食いや咽頭詰りについての具体的な対策を検討する必要性を感じ、実施するようになった。
47. 精神科における咬合力改善への取り組み	共	2011年07月	第39回日本精神科病院協会精神医学会	中村友紀, 井戸由美子, 田頭優, 佐谷誠司, 岡村武彦, 榎本ゆり子, 高橋志乃, 前田佳子 昨年、統合失調症患者の食行動問題の改善に取り組んだ結果、意識の向上や食事時間の改善がみられた。今回、同様に咬合力向上に取り組んでいるC病院とデータを比較・すり合わせを行うことで、病院単位ではなく精神科病院としての傾向を調査した。今回他病院とデータをすり合わせる事により、患者の向精神薬の使用状況や肥満度、色変りガムの使用等から、咀嚼力を推察する事はある程度可能であると考えられる。
48. 大阪府下の精神障害（統合失調症）者における咀嚼機能評価の現状2	共	2011年01月	第14回日本病態栄養学会年次学術集会	前田佳子, 高橋志乃, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 畔上多恵子, 西田和美 精神障害者の誤嚥・窒息に関連する疾患予防の必要性が指摘されている中、精神障害者の多くには「早食い」という食行動の問題がある。今回、我々は握力及び咀嚼能力の指標である咬合力と色変りチューイングガム法から評価して現状の把握を行った。摂食時間は対照群と比較した結果から「早食い」であることが伺えた。また、咬合力と色変りガム法による咀嚼機能評価により、精神障害者の誤嚥・窒息の予防に繋がると考えられた。
49. 大阪府下の精神科障害（統合失調症）者における咀嚼機能評価の現状1	共	2011年01月	第14回日本病態栄養学会年次学術集会	高橋志乃, 前田佳子, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 畔上多恵子, 西田和美 誤嚥・窒息リスクの一つに咀嚼能力がある。今回、我々は握力及び咀嚼能力の指標である咬合力と色変りチューイングガム法からの評価で、各施設の比較検討を行った。今回、色変りガムを用いた測定により、スタッフが患者の咀嚼に対して注意をする傾向がみられた。
50. 精神障害（統合失調症）者における咀嚼機能評価の現状	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	畔上多恵子, 河野榮子, 西田和美, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 高橋志乃, 前田佳子 大阪府下の精神科病院デイケア(4施設)に通所している統合失調症患者で本調査に同意が得られた117名を対象に同一メニューによる摂食時間の調査、咬合力、咀嚼力(色変りガム)の測定を行った。摂食時間は対照群と比較した結果から短時間であることから「早食い」であることが伺えた。また、咬合力と色変りガム法によるa*値の咀嚼機能評価により、精神障害者の誤嚥・窒息の予防に繋がると考えられた。
51. 当院外来患者における咬合力についての調査	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	榎本ゆり子, 高結花, 増子美佐, 三谷麻希, 井戸由美子, 前田佳子, 高橋志乃
52. 精神科における早食いや咬合力改善への取り組み	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	田頭優, 井戸由美子, 中村友紀, 佐谷誠司, 岡村武彦, 高橋志乃, 前田佳子 精神科の患者は、薬の副作用もあり食事時の誤嚥や窒息の事故の危険性が高いといわれている。BGMを用いた環境作りや咬合力・咀嚼回数向上のプログラムを実施することで、食事時間の改善がみられ、咬合力の向上の傾向もみられた。病初期より多職種協働にて、早食い防止や咬合力向上に努めることが患者のQOLの維持に繋がると考えられる。
53. 大阪府下の精神障害者における咀嚼機能の比較検討	共	2010年11月	第38回日本精神科病院協会精神医学会	西田和美, 畔上多恵子, 井戸由美子, 榎本ゆり子, 高橋志乃, 前田佳子 今回、我々は咀嚼能力の指標である咬合力と色変りチューイングガム法(以下、色変りガム)からの評価で、各施設の比較検討を行った。4デイケアのうちDは1年前より多職種協働で昼食時に音楽を導入した食環境作りや咬合力アップ運動等を実施しており、その効果がみられたのではないかとと思われる。今回、色変り

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
54. 咬合力アップ事業における顔筋トレーニングを併用した運動の効果と方法～活力のある高齢者をめざして～	共	2010年10月	フィットネス・サミット2010	ガムを用いて測定することによって、スタッフが患者の咀嚼に対して注意をする傾向がみられた。 芝崎美幸, 高橋志乃, 前田佳子 兵庫県西宮市独居高齢者の介護予防、並びに活力のある高齢者を狙うための健康づくりを支援するために、咀嚼能力に注目し、機能向上トレーニングを行うプログラムを考案して実施後の状況と関連因子を明らかにすることを目的とした。運動介入後に殆どの参加者に咬合力の増加が認められた。運動を導入することで、咀嚼や運動に対しての高齢者の意識が変化したことも今回の結果に繋がったと推察される。
55. 外来肥満患者における栄養教育の媒体と性格傾向の関連性について	共	2010年09月	第57回日本栄養改善学会学術総会	高橋志乃, 谷野永和, 前田佳子 今回われわれは、東大式エゴグラム新版TEG2を用いて、性格によって患者の意識変容や検査値に与える影響について調査を行なった。性格分類の結果より予後が良い群と予後が悪い群の2群に分類した。罹患年数が経つにつれて検査値の改善が見られず、かつ予後が悪い群の人数が多かった。このことから、性格が罹患年数や検査値に与える影響が伺われた。
56. アメリカンフットボール部員における食事状況について～夏季の合宿における対応～	共	2010年09月	第57回日本栄養改善学会学術総会	藤田和代, 高橋志乃, 前田佳子, 松葉圭子, 油谷浩之, 松葉真 アメリカンフットボール部員の夏季合宿に帯同して、選手の食生活の実態を把握した。
57. アメリカンフットボール部員における食事状況について～新・旧1年生のエゴグラムと食事状況の比較	共	2010年09月	第57回日本栄養改善学会学術総会	松葉圭子, 高橋志乃, 前田佳子, 藤田和代, 油谷浩之, 松葉真 性格特性ごとの栄養素摂取量や日常の食生活の実態と問題点を見つけ指導し、大学生アメリカンフットボーラーの基礎となる1年に食意識を改善して、肉体的、身体的のさらなる向上のため新・旧1年生のデータ比較をおこなった。
58. A精神科病院におけるBGMの利用と摂取改善に関する効果	共	2010年09月	第57回日本栄養改善学会学術総会	前田佳子, 高橋志乃, 井戸由美子, 橋本加代 統合失調症患者に食事中にBGMを流して、早食いの改善が見られるかについて介入調査をおこなった結果、食事時間が延伸した。
59. A精神科病院におけるBGMの利用と摂取栄養改善に関する効果	共	2010年01月	第13回日本病態栄養学会年次学術総会	高橋志乃, 田頭優, 前田佳子, 井戸由美子 統合失調症患者の多くは早食いという食行動の問題がある。今回、我々は食事中に音楽療法を導入して早食いの改善がみられるかについて検討を行った。BGM介入後で食事摂取時間が若干延長したことから、対象者が落ち着いて食事摂取できる食環境の継続により、早食いの改善がみられることが示唆された。
60. 糖尿病患者におけるDVDとパンフレットの栄養教育効果の検討	共	2009年12月	第8回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	高橋志乃, 佐々木悠里, 瀬川早代, 北谷直美, 辻とも子, 前田佳子 糖尿病治療の基本の一つは食事療法であり、患者にやる気をおこさせる栄養教育が求められる。今回、調理方法を視覚的に分かりやすく伝える教育媒体を作製し、媒体の効果について検討した。媒体を用いた栄養教育では、対象者のメニューへの理解や調理意欲に高い意識が見られ、アンケート調査から食事に対する前向きな姿勢が伺われたことから、より分かりやすい視覚的に訴える教育媒体の有効性が示唆された。
61. 脳血管疾患患者の機能回復に与える因子について	共	2007年01月		柴田亜樹, 小林知未, 徳光恵美子, 早川みち子, 南部征喜
62. 糖尿病の食事指導の取り組みについて	共	2007年01月		竹内悠子, 任和子, 辻とも子, 北谷直美, 大串美奈子, 大屋道洋, 黒江彰, 谷口中, 清野裕
63. 加熱操作における食品の抗酸化活性への影響	共	2006年10月		石橋知奈美, 伊藤毅, 高木康之, 小倉和恵
64. 京都府北部における高齢者の食事の特徴について(第1報)	共	2006年10月		山本亜依, 遠藤朝美, 副田久美子, 谷文子, 八木典子
65. 自立を目指す高齢者の運動継続に関わる要因についてー血流測定結果と食習慣との関係ー	共	2006年10月		松葉真, 谷郷悦子
66. 要介護高齢者施設の日常生活における摂取エネルギーと消費エネルギーの評価について	共	2006年10月		左官智子, 橋本加代, 前田圭禧
67. ユニットケアにおける食事提供方法の評価について	共	2006年10月		五島千寿子, 橋本加代, 前田佳子, 谷野永和, 上羽敦子
68. 京都府和知町における高齢者の食事・生活の傾向調査ブリード・ブリードモデルを導入して		2005年09月		
69. Reduction of Blood Sugar Level in db/db Mice by Green Tea Adm	共	2004年11月		Takeo Hasegawa, Kousuke Murabayashi, Yasuhiro Kosaka

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
70. 京都府下における高齢者の食事・生活の傾向調査 京都府網野町		2004年10月		同一種、同一工程の産地が違う食用緑茶粉末をdb/db mice に16週間連続投与を行い、血糖値、体重、中性脂肪等について違いがあることを発表した。 前田佳予子、大塚由紀、池口あゆみ、茶野真由美、森恵子、野田めぐみ、高橋大輔、谷文子、前田圭禧、真鍋篤志、 京都府船井郡和知町の高齢者1508人を対象に食生活実態調査を開始して3年が経過した。和知町における食に関する内容で地区診断を行い、和知町保健センター職員・老人クラブ、ヘルスメイトのメンバーと話し合い、和知町としての食の自立支援のあり方について検討した。調査結果を学生が老人クラブや社会福祉協議会のメンバーに報告や指導を行っていることを報告した。 前田佳予子、大塚由紀、池口あゆみ、茶野真由美、森恵子、野田めぐみ、高橋大輔、谷文子、前田圭禧、真鍋篤志、 京都府竹野郡網野町における高齢者の食生活調査を実施して、3年の経過を評価し、高齢社会での栄養管理や「食の自立支援」について教育や支援方法について検討した。 京都府下における漁業の町と沿岸部と山間部の高齢者の食生活の違い、地域での取り組みについて調査を行った。
71. 京都府下における高齢者の食事・生活調査(7)	共	2004年10月		
72. 京都府下における高齢者の食事・生活調査(6)	共	2004年10月		
73. 京都府下における高齢者の食事・生活の傾向調査 和知町		2004年10月		
74. 京都府下における高齢者の食事・生活調査(4)～(5)		2003年09月		
3. 総説				
1. 日本在宅栄養管理学会の歩み	共	2015年06月	日本在宅栄養管理学会Vol.2(3)3-7	田中弥生, 前田佳予子 在宅訪問栄養食事指導の誕生から認定在宅訪問管理栄養士の役割と現状そして、日本在宅栄養管理学会の今後の展望について
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 管理栄養士による在宅高齢者の栄養管理のあり方に関する調査研究事業	共	2015年03月	公益社団法人 日本栄養士会	本川佳子, 前田佳予子, 工藤美香, 田中弥生, 小野沢滋, 原礼子, 遠藤慶子 在宅訪問栄養食事指導を実施する管理栄養士実態調査を「在宅訪問管理栄養士認定制度」における事例レポート366事例より、事例対象者の年齢、介護度分類、介護度別の疾患、介護度と認知症の関係、がん患者への見取りの現状について調査した。 太田秀樹、三浦久幸、齋藤京子、葛谷雅文、前田佳予子、大石善也、大澤光司、大塚理加、佐藤美穂子他 在宅療養患者において、生活の質を維持するには、栄養状態の維持・改善は不可欠である。特に高齢者においては、低栄養状態が散見されるのも事実である。どのような要因が低栄養に関連しているのかについて在宅療養者の実態を明らかにした。
2. 在宅療養患者の摂食状況・栄養状態の把握に関する調査研究	共	2013年03月	国立長寿医療研究センター	
3. 雑誌掲載：社団法人兵庫県老人福祉事業協会平成18年4月28日第62号P4「福祉の風」～栄養ケアマネとは～		2006年		
4. 雑誌掲載：給食ビジネス 食が変わる！食を見直す！ 柴田書店 平成17年9月20日発行 P45-48 「食行動と介護サービス予測」について		2005年		
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2014年6月1日～現在	日本在宅栄養管理学会 日本公衆衛生学会 日本病態栄養学会 日本老年歯科医学会 日本糖尿病学会 日本静脈経腸栄養学会 日本栄養改善学会 日本家政学会